

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」

(マルコ5 : 41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 5 号

2006年12月25日

発行人：吉谷かおる

「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」(ルカによる福音書第2章6,7節)

井田涼子 (京都教区)

11月に入ると、街中にスイッチが入り、キラキラピカピカ、『クリスマスは家族そろって』『クリスマスにプレゼントを...』あちこちから聞こえてくる声。12月になると、さらに街が明るくなって、もっと音が大きくなって、街中が賑わって浮かれて...。明るいのか暗闇の中にいるのかわからなくなって、小さな大切な声が大音響に消されて聞こえなくなる。ある年の12月の日曜日、礼拝に行くために車を運転しながら、ラジオをつけると、クリスマスキャロルとともに「今年のクリスマスの準備はしましたか？」という女性の声が聞こえてきた。『そうか、今日の礼拝の後で...』と考えていると、「もうホテルの予約はしましたか?』『えっ?』『聖なる夜を特別な人と素敵なホテルで過ごしませんか。美しい夜景をバックにドレスアップして、ワインを飲みながらディナ

ー、予約はやはり男性が取るのかな、女性はドレスや靴、そうそう彼が飛びきり喜びそうなプレゼントも買いに行かないと.....。」まだおしゃべりは続いた。

クリスマスの準備=ホテルの予約なのか...。そのとき、人口調査の登録ために、遠いガリラヤからベツレヘムまで旅してきたもう一組のカップルのことを思い出した。大きなお腹を抱えた若い妻とその夫。長旅のせいか、妻は予定より少し早く子どもが生まれそうだと夫に話した。旅先でふたりを助けてくれる人は誰もいない。「どこか落ち着ける宿はないか。」夫は町中の宿を探したが、どこも満員。それでもやっとのことで家畜小屋の一隅に場所を見出し、やっと妻を休ませてやる事ができた。そこは馬や牛たちの息の音が聞こえてくるところ、ふたり以外だれもいない。夜更けとともに、妻の息づ

かいがだんだん大きく激しくなってきた。クリスマスはいま、静かに、力強く、確実にはじまった。ここは神さまの息づかいが聞こえるところ。

思いもよらない方法で、わたしたちを愛してくださる神さま、あなたの到来を待ちのぞむこの季節に、騒々しさから逃れて、静かな場所を見出すことができますように。そこでわたし

はこころの大掃除をして、あなたをお迎える場所を用意します。お招きするにはあまりにもせまいのですが、どうぞおいください。冷えて硬くなったところを、あなたの笑顔でほっこり温めてください。わたしが会うひとびとの中にもあなたを見出させてください。そしてそのひとといっしょに歩くことができるようにしてください。御子イエス・キリストのみ名によって、アーメン

…これからの女性会議に望むこと…

管区総主事 司祭 三鍋 裕 (横浜教区)

夏の女性会議では大変にお世話になりました。多少ご相談にもあずかっていましたので、準備にどれほどの時間とエネルギーを費やされたかは存じております。スタッフの方々、本当にご苦労様でした。参加者の方々にも、ご苦労様でしたと申し上げます。限られた時間の中でありとあらゆるテーマに取り組んだのですから大変でしたね。

男性の参加があったのも良かったと思います。女性と男性だけに分けるのは適当でないかもしれませんが、女性の問題は男性の理解と協力がなければ解決しません。男性が学ばなければなりません。女性の問題とは男性の問題でもあるのです。限られた時間でしたから無理もありますが、「会議」ですから聞いて学ぶだけでなく色々な考えを分かち合う機会

も欲しかった気もします。

皆さんのご努力に感謝しながら欲を言わせていただければ、関心が自分たちの世界にとどまっていたように思えるのです。私は HIV/AIDS に関する分科会に加えていただきました。こういう働きもあるのかと大きな学びを与えられましたが、この病気の蔓延の背景にある弱い立場に追いやられている女性の問題や、貧しくて薬があるのにただ死を待っている人々の現実に女性会議らしい問題提起があっても良かったのではないのでしょうか。我が子に与える食べ物がなく、ただ抱きしめている母親たちは忘れられているのでしょうか。人種差別の中で、更に差別されている女性たちのこともあまり話題になりませんでした。遠い世界のことではありません。この日本でぼろぼろにされ、

「使いもの」にならなくなってから自分の国に追い返される女性たち。家族からも迎えられず、母国の福祉からも日本の福祉からも相手にされない女性たち、また彼女たちのために現地で働いている日本の女性キリスト者への支援も連帯も話題にならないままでよいのでしょうか。神

さまが母か父かという問題より前に、女性会議が男性とともに発すべき声というより怒りはないのでしょうか。

不満ではなく期待を申し上げているのです。ともに学び合い、より広くより深い女性会議に発展されることを願って止みません。

\* \* \* 第1回の女性会議を終えて \* \* \*

執事 三木メイ (京都教区)

2006年8月に開催した第1回日本聖公会女性会議は、長い年月をかけて準備してきた私にとりましても、神様の豊かな恵みとお導きを直接感じることできるすばらしい交わりの時となりました。礼拝や分科会を担当して下さった方々、ゲストの皆様、参加して下さいました方々、そしてこの女性会議の開催を待ち望んで下さったすべての方々に心より感謝申し上げます。

振り返ってみますと、私自身が教会におけるジェンダーの問題についてはっきりと意識して取り組み始めたのは、女性が教会を考える会の小さな集まりに参加した17年前、1989年からです。女性だから、という理由だけで男性中心に生きることを強いられ、自分がこの世で神様から託されていると信じる仕事や働きから排除されてきた教会女性たちの苦悩に満ちた声を聞いた時からでした。その後は、92年から有志の女性たちと聖公会女

性フォーラムを毎年開催し、女性の司祭按手実現をめざす活動も始めました。98年によろやく管区総会で法規が改正されて女性の司祭が誕生し、私たちの課題の一部は達成されたのですが、残された課題には今後どう取り組めばいいのだろうかと思案しておりました。

2002年春に管区の正義と平和委員会の委員の委嘱状が来ました。そしてすぐに、同年5月の第1回南アフリカ聖公会女性会議に出席することになりました。これは偶然で突然の出来事だったのですが、私はそこでの交わりに大きく心動かされて、日本聖公会でも女性会議を開催しようと思案して帰国しましたので、後から思えばそこにも神さまのお導きがあったのだと思わずにはいられません。そして、同年11月にジェンダー委員会が発足しました。翌年8月にプレ女性会議を開催し、教会と社会の中のジェンダー課題について問題意識を持っていただくよ

う聖公会の女性たちに呼びかけました。

本番の第1回の日本聖公会女性会議では、単に女性に関わる課題について話し合うだけでなく、女性の視点からの宣教協議会として、参加者の分かち合った課題と祈りを自分たちのヴィジョンとして明確にし、文章化して公表することを目標にしました。計画段階では、この目標が実際に達成できるのかどうか不安でしたが、参加者の皆さんの熱意と賛同の意志によって、15項目を含む「呼びかけ文」を女性会議からの「声」として発信することができました。これによって、ようやく残されていたさまざまな課題を担い合って歩み始める第1歩を記すことができました。

私は、この第1回の女性会議の報告書作成をもってジェンダープロジェクトメンバーを辞任いたします。これまでの皆様のご支援に感謝申し上げます。入れ変わりに新しく2名のメンバーが加わる予

定です。教会はどこでも信徒・教役者の減少でこれからますます困難な状況を迎えることになることが予想されますが、それでも私たちが「キリストのからだ」としてこの世での使命を生き生きと果たしていくために、神様が恵み豊かな出会いと交わりと学びの時を備えてくださることを信じます。そして新たなジェンダープロジェクトの働きと女性デスクの働きに期待をしています。皆様もどうぞ引き続きご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。聖公会の女性のネットワークがますます豊かにされ、女性と男性がより良きパートナーシップをもって協働していくことができますように、との祈りをもって私自身も神様のお導きに従ってさらなる歩みを続けていきたいと願っております。

## 第1回日本聖公会女性会議 参加者からの声

安慶田陽子（沖縄教区）

「女性と労働」の分科会に参加して、改めて世間知らずだと痛感しました。ジェンダーと言えば「女性(男性)らしさの固定概念からくる生きにくさ」くらいにしか考えていなかった。分科会の参加者には実際に数十年前に若年退職(何と25歳)という現実を会社相手に戦った人。結

婚(出産)したら退職勧告。復帰しても毎年更新の契約社員で社員並の仕事や転勤の条件でも労働組合がないため会社との交渉が解雇の危機と直面する。生きていくため苦しいだけの選択肢から自らの意志で選択したことにさせられていて生々しい。子ども(家庭)か仕事か…等の二者択一は余りにも辛い現実でしかない。

女性は結婚・出産・育児・介護など人生転換期の中で、どうしてもぶつつかってしまう問題があるからこそ、誰もが生きやすい世の中へと発信する強さがあるのだと思う。自分の人生に感謝をもって受け入れしなやかに生きるには構造的に弱者にされている者にこそ光を当てる思考。キリスト者の生き方そのものだと思う。

その他にも分科会での女性の視点に立ち聖書の読み解く分科会は初めての経験でとても興味深かった。綺麗な布とロウソクを地べたに置いて皆で囲んだ礼拝も、素朴だけど心が元気にあたたまる雰囲気本当に感動した。

女性会議ってどんなことしてるんだろうっていうくらいのモチベーションの私でも引き込まれるような内容の深さと初対面の姉妹との繋がっていく瞬間は大きな恵みだった。

この会議を企画運営された皆さん、ありがとうございます。

#### 小出裕司 (大阪教区)

私は大阪教区より男性信徒1名として派遣されこの会議に参加することが出来ました。予備知識なし、あとで、2003年に「プレ聖公会女性会議」が開催され立派な報告冊子が発行されていることを知った。第1回聖公会女性会議の開催にも女性司祭をはじめ、スタッフにより手作りで準備されていて感心しました。女性ならではの、細かい配慮がされていました。オリジナルな礼拝、グッズ類。女性司祭

に直接お会いできることを、楽しみにしていました。国内のみならず、海外でも広く活躍されている様子がよく判りました。日本聖公会信徒の65%は女性であることを別にしても、宣教には、男女の区別はあるはずがない。そろそろ、女性司祭を正當に評価すべきです。

#### 聖職候補生 金善姫 (中部教区)

女性会議に参加できて本当に感謝しております。

韓国で生まれ、育てられた私が、日本での生活、今は神学を学んでいる者として、フェミニスト神学との出会いをはじめ、ジェンダー・人権を考える中で、色々豊かな学びを与えられました。

豊かな礼拝とメッセージ、分かち合い、プログラムの間の様々な活動に参加している人々のお知らせとお誘いのメッセージがそこにいる人々の心をつないでくれたと感じ、そこに集まった皆が手をつないで、共に歩いていく人であることに励まされました。

その場に集まっている人々の心に蒔かれた種が神様の豊かな恵みによって芽を出して、花が咲かれるその日まで生活の中でも伝えていきたいと願っています。

#### 司祭 高田眞 (横浜教区)

この会議は、わたしの記憶では、数年前から管区にジェンダー委員会が設けられ、その時から、彼女たちがあたためてきたものであるように思います。

この会議を行うために、2003年に「ブレ聖公会女性会議」を行い、2005年には「第14回聖公会女性フォーラム」に参加し、準備を重ね、今年やっと「第1回日本聖公会女性会議」を行うに至った経緯の内に彼女たちの深い祈りを感じました。その祈りはプログラムの一つ一つの中に、更に豊かに感じ取れました。そんな祈りに満ちた会議の中で過ごすことができ、本当にたくさんの事柄に、人々に出会うことができたことを何よりもうれしく思っています。最後の日に聖餐式が行われましたが、本当にそれらのお恵みに対する感謝と喜びでいっぱいにされました。

長い間、日本聖公会の中で支配してきた「父権制」に何度も、何度も気づかされました。わたし自身の中に、そして外に、そのことがあり、またそれによって支配されてきた自分を知らされました。そのことによって、どれだけ、多くの女性の人たちを隅に追いやってきたか、そのような世界の上に立って物事を進めてきたかを、改めて知らされました。そのような中で何度となく女性たちは、わたしたちにそのことのゆえに起こっている課題を共有し、ともに解決するために連帯を求めてきました。にもかかわらず、そのような進め方では、何も生まれてこなかった。そこでもはや男性を当てにすることではなく、まずは、当事者である女性たち自身が、主体的に、立ち上がって、積極的に物事を進めていかなければという切迫感と勢いを感じました。と同

時にこのためには何百年もかかることかもしれない、しかし最初の一步をわたしたちが踏み出さなくてはという、ゆったりとした歩みの中での確かさも感じました。

今自分たちが生きている聖公会、日本におけることはもちろんですが、それらの枠にとどまることなく、世界そして様々な地域の女性たちと連帯しながら、その抱えている課題の一つ一つをていねいに見つめながら、それらを通り過ぎることなく、誠実に向き合っていこうとしている祈りを感じました。

また決して、自分たちのことだけでなく、自分たちが父権制の下に弱くされ、小さくされてきたことを、神様から与えられた祝福とさえ受け止めながら、この世界の至るところで、弱くされ、小さくされている人たちと共に生きていくようにと、主から呼び出されていることを覚え、それに応えていこうという祈りがありました。

今この世界で起こっている戦争、分裂という途方もなく大きな課題を、自分たちへの挑戦として受け止め、そのことによって犠牲者となっている姉妹たち、兄弟たちの内に在って、主イエス様と共に、主による癒しと和解、正義と平和のために、共に連帯しながら祈り働く者として遣わされているというメッセージを聴きました。

そのような世界の中で起こっている祈りの中で、国際聖公会女性ネットワーク

(International Anglican Women's Network = IAWN) という活動が聖公会の中に生まれたことを聴きました。

このような世界の祈りのうねりの中で、わたしたち自身も新しい扉を開くよう呼びかけられている。決して女性たちだけでなく、男性と共に共同してその扉を開

くようにと呼びかけられています。そんなことを学ばされた素晴らしい会議でした。

どうぞ、わたしもこれらの祈りに加わり、共にささげ続けて行くことができま

ジェンダープロジェクトより

聖公会新聞9・10月合併号の記事について

聖公会新聞9・10月合併号に「第1回日本聖公会女性会議」の記事が掲載されました。一面のトップにとりあげられジェンダープロジェクトとしては大変うれしいことではあるのですが、プロジェクトメンバーはその内容に疑問をもちました。特に、文中小見出し「女性の連帯とは？」以下の文章については、私たちが伝えたいことが伝わっていない、と感じました。(具体的には「セクシュアル・ハラスメントに関するバイブルシェアリング」と表現されていたことや「包括言語」についての不十分な表現などです。) 報道というものはいつも情報を出した側の意図に沿うものとはならないことわかりつつ、もう少し丁寧に伝えて欲しかった・・・という思いが、時を経た今でも強くあります。

聖公会新聞には、その旨をお伝えし11月号に間に合うように訂正の原稿を送りましたが、掲載されることはかないませんでした。一度人の口から出た言葉は、その瞬間に違うものとなって一人歩きしていくもの・・・というようなことを言う人がいます。しかし、第1回の記念

すべき女性会議の内容が主催者の意図とは違った文章で歴史に残されることはとても残念です。聖公会新聞を読まれてない方にはわかりづらい内容かと思いき、また混乱をさせてしまうかもしれませんが、今一度この紙面を通じて、「私たちはこのように表現してほしい」ということをお伝えしたいと思います。

「北川さんの声」に続く文以下を全文次のように また、礼拝のコーディネートを担当した女性が教会を考える会のメンバーは「今回の会議では、悲しみ、苦しみの中にあるなど、さまざまな思いを持っているすべての人によりそい、共感することを大切にするためにオリジナルの礼拝を考えた。礼拝の中で用いる言葉や歌も、誰も排除することがないようにという視点から選んでみた。また朝の礼拝や就寝前の祈りは、エコロジー、連帯、非暴力などテーマを設定したが、さまざまな立場から共に祈ることの豊かさを体験できるように願っている。」と語った。また、アリス司祭の講演に先立って京都教区でおきた元牧師による性的虐待事件の報告があ

り、しばらくのメディテーションの後、聖書からの発題が行われた。選ばれた箇所は「ルカによる福音書1:39~45」。笹森司祭は《マリアとエリサベトの連帯》と題して語られたが、女性であるが故の困難を抱えたマリアとエリサベトがその現実を受け止めながら連帯した姿に触れ、「私たち女性にとって『主がおっしゃったことは必ず実現する』という聖書のことばに励まされ、現実を直視すること、真実を語る勇氣をもつこと、また、苦しみ、悲しみの中にある人が声をあげることによってさらに傷つけられることがないように連帯していくことが大切ではないか」と話された。

京都教区での事件の報告(元牧師による性的虐待事件)については、どのタイミングで報告すれば一牧師の不祥事としてではなく、教会という構造の中に潜む問題として参加者が考えることができるのかということメンバーは会議の直前まで悩み、検討に検討を重ねた結果、聖書の発題の前に行うこととなりました。「セクシュアル・ハラスメントに関するバイブルシェアリング」という表現はもっとも避けたかつ

た表現ですし、笹森司祭による聖書の発題はそれに言及したものではありませんでした。また、包括言語については礼拝担当の実行委員の方々の女性の視点からの歩みの歴史とでもいうべき大切な部分です。新聞を読む方が理解されるにはもっと丁寧な表現が必要であったと思います。

この出来事を通して、私たちは情報を伝えることの大切さと共にその難しさを痛感しました。私たち自身も伝えたいことを少しでも正確に伝える努力を重ねながら、活動への理解者、協働者が広がっていくことを心から願っています。(大岡左代子)



### 「タリタ・クム」について

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。(三木メイ)

## 「北京行動綱領」って何？その3

大岡左代子（京都教区）

北京行動綱領について・・・いよいよ最終回。

今号は、北京行動綱領 12 項目のうち最後に残った「女性とメディア」「女性と環境」「女兒」についてです。

### J. 「女性とメディア」

マスメディアや新しい情報メディアは男女の平等な社会を実現するために大きな役割を果たしうる分野です。しかし、その認識は今の社会で十分でしょうか？2000 年の報告では日本の放送業界、新聞社等で働く女性の比率は1割前後と世界最低レベルでした。2005 年までに30%とすることが重点目標の一つとされましたが、達成されていないのが現状です。

また、伝達される内容には女性を差別する性・暴力表現や性別役割分業を前提とした表現などで性差別を助長していることがたくさんあります。CM やバラエティー番組などいろいろな場面で???と感ずることがないでしょうか？女性会議にお招きしたカナダ聖公会のアリス司祭は反省会の席で「メディアは男性主導の最後の牙城です。メディアに女性の意見が反映されることはとても大切なことです。」と言われていました。規制や法整備にたよることなく、マスメディアや多様なメディアを通じて女性自らが女性の視点で情報発信ができるようになることも大切な事柄であるといえます。

### K. 「女性と環境」

食べ物、空気、ごみ、放射能汚染、地球温暖化、遺伝子操作・・・数えだしたらきりがないくらい私たちのまわりには環境問題があふ

れていますが、なぜ「女性と環境」なのか・・・それは、今やこの問題は国境を越え、地球規模で考えなくてはならない重要な課題であり、かつ経済発展中心、効率第一主義という男性主導の社会の仕組みの中で起きてきたジェンダーの課題を含んでいるからです。世界の女性たちが環境に関わる専門知識をもっと身につけ、国際的に連携を図っていくことがとても大切です。「2・8」の原理（世界の食料などをはじめとする生活に必要な

ものの80%は地球の20%の人によって独占されているという見方）の「2」に入る日本人は、この環境問題にどのように貢献できるのでしょうか。

### L. 「女兒」

女兒はしばしば児童買春や児童ポルノの対象、性犯罪被害者となります。

「女」の性を持ち、「子ども」であるという二重の差別の中で心身共に深く傷つけられている女兒がどれだけの数いることでしょうか。見知らぬ人からの暴力、身近な人からの暴力は、幼い子どもの心を闇へ押し込めてしまいます。性的虐待を含む児童虐待や子どもポルノの禁止・規制はまだまだ対策が不十分です。子どもの時代から正しい人権意識を身に着けること、自分を守る術を知ること、性教育を男女共に行うことなど教育の分野と重なる課題が数多くあります。子ども差別、女性差別という根っこにひそむ差別を断ち切らない限り傷つけられ

る女兒の数は減らないでしょう。ちなみに2007年の2月に開かれる予定の「国連女性の地位委員会」での重要課題は「子どもと少女」です。アングリカンの女性たちもニューヨークに集い、同じ課題について意見交換がされることと思います。

3号にわたって「北京行動綱領」についての記事をかかせていただきました。8月には「第1回日本聖公会女性会議」が開かれ、12項目の中のいくつかが分科会としてとりあげられました。1995年、北京での世界女性会議に集った女性たちの思いが12項目に込められています。以来、「世界女性会議」は開かれていません。それは世界的なジェンダーバッシング、ジェンダーバックラッシュの流れの中でこの綱領の

内容が後退することを恐れる世界の女性たちの知恵でもあります。日本も大変厳しい状況になりつつあることをどれほどの人が感じておられるでしょうか？豊かさゆえに、便利さゆえに見なければいけないことがらを見えないようにされているのではないか……時々そんな疑いの目で自分の生活、社会の出来事を見てみる必要があると思います。「北京行動綱領」は私たちの日常に潜むジェンダーの課題を見事に網羅しています。難しいこと、関係のないことと思わずにこれからも関心をもっていたいただければ……と思います。

すべての人がその存在を尊重しあい、信頼しあい、社会の営みに参与することができる日を夢見て自分の足元から歩みだしたいものです。

## ♪ ♪ Book Review05

評者：吉谷かおる

『女信長』 佐藤賢一 (毎日新聞社、2006年、1890円)

『大奥』、 巻 (以下続刊)、よしながふみ、白泉社、2006年～ (600円、620円)

一年の終わりにさしかかり、今年はどの本が一番よかったらうかと振り返る頃となりました。結論をいうと、『わたしを離さないで』(カズオ・イシグロ、早川書房、1890円)が私の今年のベスト1です。しかし、この本を読むには予備知識がないほうがいいので、未読のかたはぜひお読みになってくださいとおすすめするにとどめます。

このところ、私は作品にあらわれる作家の<女性観>が気になっています。前号では『女教皇ヨハンナ』で男装の女性教皇を取り上げまし

たが、「男と見せかけて実は女！」というヒロイン像が日本でも書かれていました。それが歴史小説の旗手、佐藤賢一の『女信長』です。あの織田信長が女だったというのですから、じつに奇抜な着想です。どんな信長像を見せてくれるのかと期待しましたし、実際にその設定を生かした面白い物語として読むことができました。しかし、この主人公はヨハンナとは違って、女性読者の共感を得られなかったのではないのでしょうか。

たしかに、信長が女だったと仮定してみると、

うつけ伝説から本能寺の変まで、信長にまつわる謎のあれこれが面白いように解けていくのです。女だから、保守的な男に比べて合理性を重んじ、現実的で、金銭感覚にすぐれている。女だから、戦闘に耽溺する男と違って、天下を統一し戦乱の世を終わらせることに真剣になる。これで、楽市楽座も、鉄砲隊の起用も、みごとに説明がつきます。そして、お長（信長）の初めての男は斎藤道三（その娘で正室となる帰蝶とは気心知れた女友達になる）です。明智光秀とは当然男女の深い仲であり、浅井長政に懸想をしたりもするお長は、自分の美貌と閨房での技でどんな男も手玉にとることができるかと信じています。もともと織田信長は、傲岸にして伶俐、というキャラクターでファンが多く（私もそのひとり）これに性的魅力が加わるならば鬼に金棒となりそうなものです。ところが、このお長が従来描かれてきた「男信長」よりも魅力的な人物像になっているかという、それがそうでもないのです。

というも、この著者はこの本に限らず「女とはこういうもの」という決めつけによる描写をしすぎる傾向があり、しかもそれが尻軽、ヒステリー、嫉妬、思慮の浅さといったところに集中しています。私はこの著者の作品はほとんど出る度に読んできましたが（私見では『カエサルを撃て』が最高傑作）なぜこの人の描く女性はいつもこんなに馬鹿で好色な人ばかりなのかと不思議でたまりませんでした。また、男性主人公が女性を陵辱するシーンが多く見られ、そこに来るといやに興がのっているようで、バイオレンス小説と見紛うような描写が続くのも特徴です。しだいにこの作家の女性観は

ひどく歪んでいるのではないか（何か女性に対して恨みでもあるのか）、という疑いを払拭しきれなくなってきた、とうとう最新作『第二次アメリカ南北戦争』は読み通すことができませんでした。ネット上で作家の篠田真由美さんが公開している日記に「私はこの作家の女性観が嫌いだ。品性下劣な印象がある。彼の書いたジャンヌ・ダルクは無能なヒステリー女だった。よほど出会う女性に恵まれていないのだろう」とあるのを見つけ、深く肯いたしたいです。惜しいことですが、人が長年かけて培ってきた女性観は、容易に変わるものではないでしょう。

男と見せかけて実は... というのとは少し違うのですが、今年一番の衝撃作は、漫画の世界にありました。センス・オブ・ジェンダー大賞（そういう賞があるのです）受賞作、よしながふみ『大奥』がそれです。これは江戸時代を舞台に、疫病の流行から男子人口が極端に減少したことによって男女の社会的立場（ジェンダー！）が逆転した世界を描くものです。この世界では男女の人口比が大きく崩れたために、稀少な男子は子種をもつ存在として大事にされ、労働は女性が担うことになっています。そして將軍は女、大奥に居並ぶのは美男たちです。紀州から出てきて八代將軍となった吉宗が幕府の改革に乗り出すところで、第一巻が終わり、二巻では春日局と家光の時代に戻ります。吉宗のかつよさが評判のこの作品ですが、性役割がここまで徹底的に逆転した世界を描かないかぎり、多くの男性は、女性がおかれている状況というものを理解できないだろう、と唸られるすぐれた設定と巧みなストーリー展開の注目作です。漫画はちょっと、という方も機会

がありましたら、手にとっていただきたいです。日本の「少女マンガ」にはジェンダーの境界に疑問を投げかけてきた伝統があります。

凜々しさのきわだつ吉宗に比べると、信長は才能あるヒステリー女としか見えない。これは

女性の自己イメージと男性の女性観の違いなのでしょう。男性作家にも好ましい女性の登場人物を造型する人はいくらでもいるのですが、来年の読書界も収穫の多い年になりますように。

### ジェンダー口メモ 「ジェンダー・フリー」とは???

いつもカタカナ語が多くてごめんなさい!と先に謝らせていただきます。今回は「ジェンダー・フリー(gender free)」と「バックラッシュ(backlash)」についてお伝えしたいと思います。「ジェンダー・フリー」は、「ジェンダー・フリー教育」というかたちで目にされることの多いことばなのではないでしょうか。かつてみなさんも、なんで女子だけが家庭科を学ぶのか、なんで出席簿は男子が先なのか、なんで女子の制服はスカートのみなのか、といった疑問を抱いたことがあるのでは。家庭科の共修、男女混合名簿、制服の見直しなどが行われるようになったのは、この「ジェンダー・フリー教育」の発想に基づく具体的な取組みの成果です。主に教育の場における性差別や性別役割を乗り越えるために提唱されてきた考え方が「ジェンダー・フリー」で、子どもたちを「男だからこうあるべき、女だからこうあるべき」という枠組みに押し込めずに、それぞれの個性が尊重されるように配慮した教育をしようというのが「ジェンダー・フリー教育」の目指すところだといえます。ところが、教育場面でのジェンダーによる制約が少なくなってきてよかった、と思われたのもつかのま、「ジェンダー・フリー」を「男女の区別をなくすことだ」とか「中性人間をつくることだ」と曲げて解釈する人たちが現れ、修学旅行では男女同室で寝かされているというありもしないことをでっちあげてまで、「ジェンダー・フリー教育」をやめさせようとするキャンペーンがはられるようになりました。このようなジェンダーの平等を求める動きに対する攻撃を「バックラッシュ」と呼びます(より一般的な意味では、政治的・社会的な改革運動に対する反動全般を表すことばです)。「バックラッシュ」が目立ち始めたのは「男女雇用機会均等法」が改正され、「男女共同参画社会基本法」が成立した1999年頃からとされます。組織的なバックラッシュの攻撃目標にされたものが、「ジェンダー・フリー教育」と「性教育」でした。正しい性知識や性行動に伴う責任を教えるのは重要なことなのに、バックラッシュ派は「性的自己決定」を自分の好き勝手にセックスをすることだとして「性教育」を排撃しようとしています。アメリカのキリスト教右派勢力の推進する「純潔教育」との結びつきもその背後にあるようです。彼らの土俵にあがって議論する必要はないのですが、政治的な影響力が大きいので、その動向から目が離せません。(吉谷かおる)

**管区に“女性デスク”が設置されました～どうぞよろしく！** 木川田道子（京都教区）

今年5月に行われた日本聖公会第56定期総会において、管区に「女性に関する課題の担当者」（長いので“女性デスク”と略称することもあります）を置くことが決まり、今期は山野繁子司祭（東京教区）と私、木川田道子（京都教区）が担当することとなりました。これは、『タリタ・クム』3号に報告されているように昨年6月、英国で開かれた第13回聖公会中央協議会（ACC）において「各管区に女性デスクを設置すること」という決議が採択されたことや日本聖公会においてもこの決議を受けて、教会におけるジェンダー平等に向けての取り組みがこれまで以上に強められることを願って総会へ提案されたものです。これらのこと背景には、（これまで『タリタ・クム』でもとりあげてきたように）女性の権利は人権であり、そのために克服しなければいけない課題が数多くあるという現状への認識の高まりと、この世界の破れに対してキリスト者は、積極的に破れを繕う業へ参与することが促されている、ということがあると思います。ACCの中に生まれたIAWN（世界聖公会女性ネットワーク）は、2002年以降、国連女性の地位委員会に代表を送り、その年々に挙げられる重点的な課題について世界の女性たちと取り組むべき目標について共に考え、意見を表明してきました。今年の私たちの夏の女性会議でも実にたくさんの「女性に関する課題」が挙げられ、話し合われました（詳しくは、近日中に発行され

る報告書をご覧ください）。私たちの教会の構造自体の中にも、昨年明らかになった元牧師による性的虐待の事件のように、被害を受けた女性の声がかき消される、という現状があります。女性であるということでも人権が尊重されなかったり、意見を軽んじられたり、意思決定の場に居合わせられないとすれば、やはりその意識は変えられ、またその意識を支える仕組みも変えられていかなければならないと思います。

そこで、私たち女性デスクは、IAWNを通じた世界の聖公会女性たちとのつながりを深めながら世界の課題を共有することと、当面の目標を、1)各教区で女性に関する課題の研修の機会を提供すること、2)教会・教区・管区の意思決定機関の中に、女性の意思をより大きく反映させること、3)女性関係の諸団体の協力を進めること（この新しいつながりの中でもしかしたら共通の課題がみつきり協働していく可能性が生まれるかもしれません）と設定し、これらのことをジェンダープロジェクトと連携しながら進めていきたいと思っています。今、特に急ぐ課題として今年の総会で決議された、各教区に「セクシュアル・ハラスメント防止委員会」を設けるためモデルを策定する件について、管区宣教主事と協力しながら作業を進めています。課題は多いですが、皆さまと一緒に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお祈りします。

## ジェンダープロジェクトからのお知らせ

### \* メンバーの変更

プロジェクト発足当初からのメンバー三木メイさんに代わり、西原美香子さん(東京教区)、古本みささん(神戸教区)が2007年1月からジェンダープロジェクトのメンバーに加わってくださることになりました。また木川田道子も女性デスクの立場からジェンダープロジェクトの会議に参加することになります。

### \* 女性会議報告書をお届けします。

女性会議報告書は12月末に発行される予定です。女性会議参加者にはジェンダープロジェクトから直接お送りする他、各教会へは管区事務所からのお届けとなる予定です。残部が出れば参加者以外の希望者にお分けできるかと思っておりますので必要な方は木川田または管区事務所までご連絡ください。また女性会議にあわせてパンフレット「ジェンダーってなに? ~教会とジェンダーを考える」「女性の視点で聖書を読む」が発行されました。教会での学びなどにどうぞご活用ください。必要な方はご連絡下さい。

Merry Christmas and A Happy New Year

---

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3~4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。よりよい紙面にしていくために、ご意見・ご感想をお待ちしています。今号は女性会議特集号となりました。来年はまた新たなチャレンジがはじまる予感がします! お元気でよい新年をお迎えください。(吉谷)

---